

第72回 国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 銀賞

東京都立国際高等学校 3年

岩崎 菜摘

課題②

あなたが国連の総会議場で自由にスピーチすることができるとしたら、何を訴えるか。

副題

自由な国香港はどこへ

「香港」と聞くと何を思い浮かぶだろうか。100万ドルの夜景。山。海。それとも中国。2019年、今となつては世間で埋もれた存在となっているが、2019年の香港デモを私たちは忘れてはいけない。

2016年、小学三年生だった私は親の仕事の都合で初めて香港に渡った。当時の香港は活気に満ちていて、まるで毎日がお祭りのように感じるほど人々にエネルギーがあった。香港といえば高層ビルのイメージが強いが、少し都市部を離れるとどこか懐かしさを感じる昔ながらの風景も残っていて私はそんな香港のギャップに惹かれていた。初めは、人の多さや言葉の壁に戸惑い「早く日本に帰りたい。」と思うこともあった。しかし不思議なことに、三ヶ月も経つと香港での生活は次第に私にとって心地の良いものになっていった。そして気付けば私は、日本の自然の香りよりも香港のビルの間に立ち込めるガスやタバコの煙、時折漂う漢方の強い香りに体が馴染んでいくようになつていった。当時私は日本で続けていたバレエを香港でも現地のスクールで習い続けていた。教室には私以外に六人の香港人の女の子がいて、シャイだった私にも彼女たちは優しく声をかけてくれた。その日々は私の中で今でも暖かい記憶として残っている。

2019年、香港で「逃亡犯条例改正案」に対する抗議活動が始まった。最初は関心が薄かった私も次第に生活の中でその影響を感じるようになった。香港は市民が自由に発言できる国としても有名だ。最初はいつもみたいに祭り感覚だったデモも、次第に若者が中心とした大きなデモとなつていった。遊んでいた場所、通っていた学校も封鎖され街はデモ一色となった。テレビには、「香港に栄光あれ」と書かれた旗を掲げ制服姿で抗議する少女たちの姿が映し出された。警察に取り押さえられている若者の姿もあった。彼らは今の私と年齢は変わらない子たちだった。

2020年、突然と流行した新型コロナウイルス。社会全体がデモのことは嵐が過ぎ去ったようにコロナに集中した。特に香港は2003年のSARSウイルスの前例があり、対策は迅速であった。私は、日本に一時帰国しており学校もオンライン授業となった。小学校の卒業式にも、大好きだったバレエスクールにも出ることはなかった。バレエスクールの仲間たちにきちんと別れを告げることもなく私は香港を離れることになった。あれから数年、香港では言論の自由が制限され警察による監視や取り締まりが強化されている。自由に発言できた社会は変わり、「中国化」が進んでいるように感じる。

5年後の2024年、私は日本のテレビ番組で香港の現状を伝える特集を見た。そこに映っていたのは、かつて私が暮らした活気に満ちた香港とはまるで別の世界だった。若者たちの声は消え、街の空気は重く、自由を感じることはできなかった。私にとってかつての香港の魅力は「自由に声を上げることができる社会」だった。若者たちが主体的に行動し、社会の未来を自分たちで変えようとする姿は非常に印象的だった。しかし、現在の香港ではそのような姿を見ることが難しくなっている。報道によると香港から国外へ移住する人々も増えており、自由や安心を求める市民の不安が高まっていることがうかがえる。

現状は簡単に変えられない。香港の面積は1110.2平方キロメートル、東京都のおよそ半分の広さに753.6万人が暮らしている。中国の圧力が日々強まる中で、コロナという自然の猛威にも見舞われ、国家としての安定さえ脅かされてきた。混乱が続く中で先が見えないように感じることもある。それでも香港の若者たちはその状況を受け入れながらも何度も立ち上がり、柔軟に、そして力強く前に進んでいく。その姿にはレジリエンスな強さがある。

香港はどんなに混乱に陥ったとしてもそこにはまた新たな芽が生まれ、力強い洋紫荺が咲くはずだ。だからこそ、私たちは「記憶」をつないでいくべきだ。消されてしまいそうな声や出来事も、誰かが覚えていればそれは未来の光となる。

そして今、香港の若者たちが失いかけている「声を上げる自由」を、私は世界の人々に知ってほしい。自由に思いを語り、未来を変えようと行動する若者の力はどんな国にとってもかけがえのない希望だ。この国際社会が彼らの、また世界中の若者たちの小さな声に耳を傾け、支えてくれることを私は高校生として心から訴えたい。